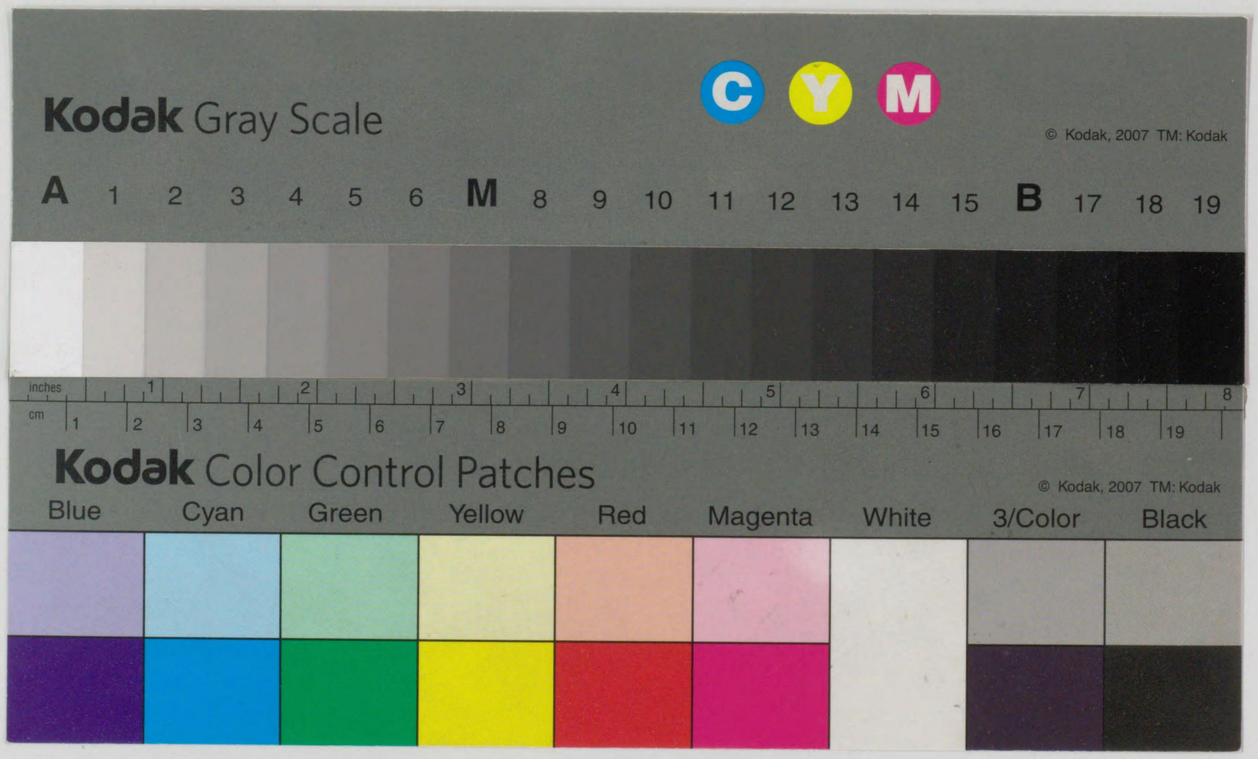
宇部の鑛工業

昭和十一年度

儀田明著



705
L8

宇部の鑛工業

俵　田　　明

705
68

705
68

705-68

宇部の鑛工業

（昭和十一年度）

俵田　明

本書は私が九州鑛山學會（昭和六年）大阪工業會（昭和九年）日本經營學會（昭和十年）燃料協會（昭和十一年）等の大會が宇部で催された際夫々異つた觀点から宇部を御紹介申す意味で致しました講演を修正增補して宇部の現狀を御傳へするために纒めたものであります。本書が工業都市宇部を認識せらるゝに何等かの御役に立てば望外の幸であります。

目　次

1　宇部炭の生產消費の現況並に其の化學的一考察 …… 1

2　工業地帶としての宇部 …… 9

3　宇部に於ける特殊企業形態（宇部式匿名組合）…… 15

4　宇部鑛工業發展史 …… 19

5　宇部鑛工業各社概況 …… 21

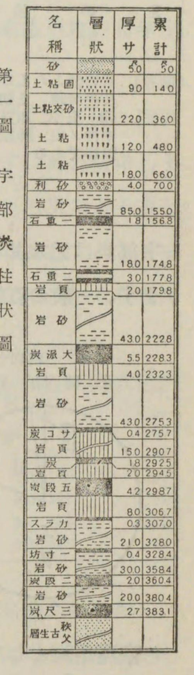
昭和一十二 朝本

705
58

第一章　宇部炭の生産消費現況並其化學的一考察

(1)　生　　産

宇部炭田は宇部市を中心に厚狹、吉敷の一市三郡、東西七里、南北五里に亘る陸地と其の沿岸より南方緩かに周防灘の海底に擴がる第三紀炭田であります、而して其の開發に關する歷史は甚だ古く今から約250年前の延寶年間には最早採掘されて居た事が明かであり、文化年間には瀨戶內海の鹽田へ輸送して燃料として使用されて居た位であります、由來幾星霜今日に至つたのでありますが其間陸地の石炭は大部分掘つて了つて現在では海底採掘を主體として居るのであります。



第一圖　宇部炭柱狀圖

此の炭田に介在する炭層は多い所で十四層もありまして大體第一圖に示す如くであります、而して其の主なるものは一重石、二重石、大派、五段、袴腰(二段)、三尺の六層であります、此等は現在年產240萬噸中如何なる塲合で採掘されて居るかと申しますと、二重石、三尺は極く少量で袴腰は五段と略同炭質ですから五段に加へて見ますと大體第一表の如くなりませう。

第一表　炭層別年產額

炭層名	年產額
五段	1.600.000
大派	400.000
一重石	400.000
計	2.400.000

第二表　宇部炭々質

炭名	元素分析(%)					工業分析(%)					
	炭素	水素	酸素	硫黃	窒素	水分	灰分	比重	水分	灰分	揮發分	固定炭素	發熱量(カロリー)
五段炭	57•52	4•69	12•93	1•33	0•86	12•01	10•66	1•330	8•30	10•20	40•95	40•55	6•140
一重石炭	57•82	4•24	15•99	1•69	0•79	9•30	9•57	1•381	6•65	12•70	42•65	38•00	5•790
大派炭	49•12	5•16	19•21	1•84	0•64	14•00	10•03	1•408	7•50	28•20	36•60	27•70	4•610

此の炭質に就て見ますと第二表の如き元素分析、工業分析の數字を見る事が出來るのであります、而して此等の石炭を供給して居る主なる炭礦は第三表の如くであります、今此の中で石炭鑛業聯合會に加盟礦のみの過去10年間の送炭高を見ると第四表の如く增加して居ります、宇部全體の出炭では此に約一割增加したるもの位になりませう。

705
58

第三表　炭礦別年產額

炭　礦　名	年產額（萬瓲）
沖ノ山炭鑛株式會社	120
東見初炭鑛株式會社	80
新沖山炭鑛組合	20
其　の　他 （推定）	20
計	240

（備考）　其の他とあるは宇部鑛業株式會社長生炭鑛　見初新鑛　第二見初新鑛　王子　西王子　櫻山　高千穗　中沖ノ山　神原　宮地　長陽　雀田等である

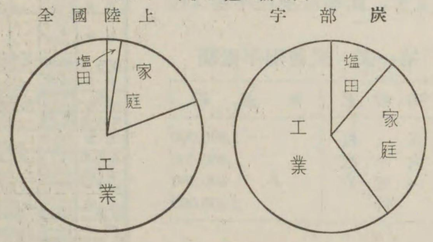
第四表　過去10年間の送炭高

年　度	聯合會加盟礦送炭瓲數	年　度	聯合會加盟礦送炭瓲數
昭和元年	1.361.673	昭和六年	1.566.609
同　二年	1.272.888	同　七年	1.614.345
同　三年	1.490.320	同　八年	1.780.291
同　四年	1 553.862	同　九年	2.152.940
同　五年	1.424.188	同　十年	2.206.218

（2）　消　　費

宇部炭は元來其の特異なる炭質に依つて一般石炭の需要と甚だ異る市場分野を有して居ります、一般の石炭市場は工場を中心として居るのであります、之に反して宇部炭は近頃こそ工業用炭が增加して來て居りますが元來其の用途は家庭用、鹽田用といふ特殊用途を主體とし、約半數の粉炭を工業用に廻した樣な事情でありました、此の點は內地石炭陸上需要量の用途別と宇部炭の用途別を比較して見ると明かになります。

第二圖
昭和十年石炭用途別需要圖



1 家庭用炭としての宇部炭　家庭用炭と言ひますと大體都會に於て炊事用、浴場用、煖房用等として用ひらるゝもので有りまして炭質の上から見ても條件があります、卽ち都會人を惱ます煤煙が少い事も必要ですし、燃燒設備等から見ても火付の良好な塊炭でなければならず、火力が一時的に强いよりは火持の長い方をとる等の點から宇部の五段炭は最も良く此の條件を具備したものとして愛用され來つたのであり、殊に粘結性の無い事、焚落となつてからも火力强烈で殆んど木炭と同一の性能を有する事等與つて力あるのであります、之を發熱量の點だけから申しますと五段炭と同樣なものが他では皆昭和石炭會社の規格で一〇格以下になつて居りますが、宇部炭のみは之を一格として取扱はれて居るのでありまして、斯の如く實力以上の價格を維持出來る事はその特性に依るのであります。

第五表　宇部炭用途別

	年　度	鹽田用（%）	家庭用（%）	工業用（%）
宇部炭	昭和八年	18•0	35•0	47•0
	同　九年	15•0	32•0	53•0
	同　十年	13•0	32•0	55•0
全國陸上	同　十年	2•2	16•1	81•7

故に宇部炭は東京市場に於ける家庭用炭の需要50萬瓲前後の中約30%から35%を占めて居りまして、京阪、名古屋も亦同樣であります、斯くして約100萬瓲の家庭用炭が毎年宇部から各都市へ供給されて居るのであります。

2 鹽田用炭としての宇部炭　鹽田用炭と言ひますのは瀨戶內海を中心とした中國、四國に集中して居る鹽田でその鹹水を煎熬する燃料に用ひられるのであります、此は前申しました樣に一五〇年も前から宇部炭の重要なる消費地でありまして特に廉い石炭である事を要件として居るのであります、それ故全國下級塊炭にとつては最も重要な市場でありますが下級炭卽ち廉い石炭程運賃が經費の大部分でありますので鹽田に近い宇部炭に有利な譯であります、其上大派炭の焚殼は鹽水濾過用として必要なる骨炭の代用として製鹽を純白佳良ならしむる特殊の性能を有して居るので古くから之が用ひられて居りまして宇部炭の愛用さるゝ一理由をなして居るのであります、而して之を裏書するものとして過去六年間の鹽田の石炭需要總額に對する宇部炭の占むる地位を見ると第六表の如く、大體に少くなりつゝある傾向もありますが鹽田總需要の半數は宇部炭で占めて居るのであります。

第六表　製鹽用としての宇部炭

	鹽田需要總額（瓲）	宇部炭需要額（瓲）	宇部炭比率（%）
昭和五年	719.631	470.114	60
同　六年	635.560	321.567	51
同　七年	7 5.189	345.792	47
同　八年	762.138	387.191	51
同　九年	764.847	367.156	48
同一〇年	702.623	315.648	45

3 工業用炭としての宇部炭　宇部炭は元來工業用炭としては不向のものとされ來つたのでありますが、夫れは一般に工業用炭は六•〇〇〇カロリー以上でなければならぬとの通念に依るのでありまして、之は宇部炭が工業用粉炭として不利なる重要な點であります、今塊炭、粉炭の値開きを同じ位のカロリーのものにとつて見ますと第七表の如くであります。

第七表　塊炭と粉炭の値開き
（昭和九年大阪に於て調査）

	塊（圓）	粉（圓）	塊粉値開き（%）
宇部炭	13.70	9.80	29•0
某　炭	12.00	9.80	18•0
差	—	—	11•0

705
58

斯の如く塊炭の價値が大で粉炭のそれが低いために塊炭の歩止りを良くするための努力は採掘に運搬にとあらゆる手段が講せられ、設備がなされたのであります、然し近年宇部徳山、岩國、防府を初め山口縣一帶が工場敷地としてロケーションの良好なるを認められ人絹を初めとして諸工場の設立、擴張の機運に乘つて宇部炭も運賃の上から工業用として競爭有利となつて來たのであります。

更に又工業用としての宇部炭の劣惡なる條件をその特殊なる利用方法によつて好轉せしめんとする研究努力によつて、工業用炭としても亦宇部炭の確實なる地歩を作り利用價値を增加せしめたのであります、夫れは第一に下級粉炭の處分方法の研究であります、由來宇部で一番困つて居つたのは粗惡炭大派の粉炭處理でありまして 四 〇〇〇カロリー前後から 三・六〇〇カロリー位までの粗惡炭には持てあまして居たのであります、今昭和石炭會社加盟の各炭礦の分析表を見ますと粉炭で 四・〇〇〇カロリー代のものは一七〇炭種のうち宇部炭を除けば五炭種しかなく、夫れも四・七〇〇－四・八〇〇位のものでありまして 四・〇〇〇カロリーを切るものは宇部の大派炭のみであります、斯の如き比類なき粗惡炭の處理は苦心研究の末**バルバライズ**して發電用に使用する事に成功し現在では此の粗惡炭が不足を告げる狀態にさへなつて居ります、それ故に宇部炭の工業用に用ひらるゝものを分類して見ると第八表の如く 七七・五%迄發電用に使用されて居ります。

第八表　宇部炭の工業別分類

工業別	計(%)	用途別		
		發電用	化學工業原料	其他
重工業	0•5	—	—	0•5
窯業	11•0	9•4	—	1•6
電氣業	19•5	19•5	—	—
ガスコークス業	0•4	—	—	0•4
紡績業	4•6	—	—	4•6
化學工業（含人絹）	64•0	48•6	10•0	5•4
計	100•0	77•5	10•0	12•5

次に硫安製造工業用として殊に水素**ガス**採取用として宇部炭の利用研究は宇部炭の工業利用價値を絶大なるものに一變せしめたのであります、卽ち此の新しい研究は、宇部窒素工業株式會社として結實し現在年一〇萬瓲以上の五段中塊を此の目的のために消化しつゝあります、斯くて宇部炭田は現在一二〇萬瓲位の工業用炭を市場へ供給して居ります。

4 **工業用炭增加の傾向**　斯くの如くにして山口縣下工業發展と宇部炭の工業的利用法の研究と相俟つて工業用への用途增大し家庭用、鹽田用の特殊地歩をも蠶食する狀態になりました、之は前述の如く宇部炭の中、工業用炭の占むる割合が昭和八年四七%から九年の

第九表　市場別消費狀況百分比

仕向地 / 年次	東京	名古屋	阪神	中國	山口縣	四國	其他	計
昭和六年	11•2	4•0	33•5	10•3	26•4	11•1	3•5	100
同七年	12•9	4•2	29•2	9•8	30•4	11•8	1•7	100
同八年	11•6	4•3	29•3	10•4	32•0	10•7	1•7	100
同九年	9•4	4•3	26•3	8•7	40•9	9•1	1•3	100
同十年	9•0	5•1	25•0	6•6	46•3	7•5	0•5	100

五三%、十年の五六%、而して本年度は六〇%をも占むる狀態に增加して來たのが之を證明して居ります、これは縣下の工業發展に負ふ事大でありまして之を宇部炭の全體の市場別消化狀態をとつて見ましても、縣下の需要が昭和六年の二六%から漸增して十年には四六%となつて居るのは工業用炭の大部分が山口縣下に集中しつゝあるを示すものであります、

殊に地元宇部の工業發展につれて需要は增大して來、昨年度宇部の工業で宇部炭を消費した量は 323•858瓲で之に對し本年は縣營第二發電所、宇部窒素工業、宇部**セメント**丈けでも約四五萬瓲を要し、工業用宇部炭一二〇萬瓲中の四〇%、宇部炭總數の二割は地元で消化されるのであります。

斯くて宇部炭は其の特殊の地盤として自他共に許し來つた家庭用、鹽田用の特殊用途への集中主義がその運賃經費てふ重き負擔を省き得る地元の消費へと地域的な集中主義に置換へられる傾向を生じ來つたのであります。

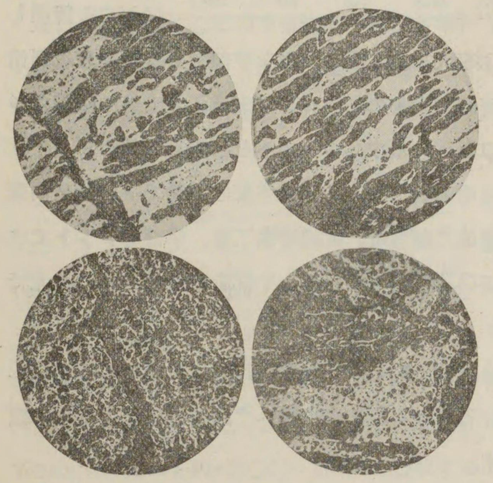
（3）　宇部炭の化學的一考察

宇部炭は之れ迄其の物理的性能に付ては良く知られて居りましたが化學的性能に付ては餘り深く研究することもせず又其の機會も無かつたのであります、四、五年前窒素工業を宇部に建設する事を目論見ました事が偶然にも宇部炭の化學的方面に研究を始める動機を作つたのであります、其の計畫は石炭**ガス**から水素源を得ることにしたのでありますが、**ガス**化の方法としては**クライザー**式の完全**ガス**化法に依ることに定めました、丁度其の時東京瓦斯會社鶴見製造所に新設された**クライザー**の裝置を同社特別の御厚意で試驗用として提供を受け、燃料研究所の御援助により數ヶ月間研究を續け得た事は誠に感謝に堪へませんでした、其の結果相當の成績を摑み得たので愈々此の方法によつて會社を起す事に決心して渡歐しました、處が彼地で種々研究調査の結果此の裝置では酸化窒素**ガス**の生成の心配と又圖らずも宇部炭の反應性が甚だ強い爲に能率上どうかと云ふことが心配となり、

705
58

遂に此の完全ガス化法を中止することにして只今の方法に變更したのであります、彼地に參りますときに石油箱に四つばかり宇部五段炭を持參し獨逸に到着しますと同時に各方面に之を分配して研究を始めましたが、イーゲー會社とコツパース會社とが殆んど同時に宇部炭の特性として反應性が非常に强いと云ふことを說明して呉れました。

第三圖　宇部コークス

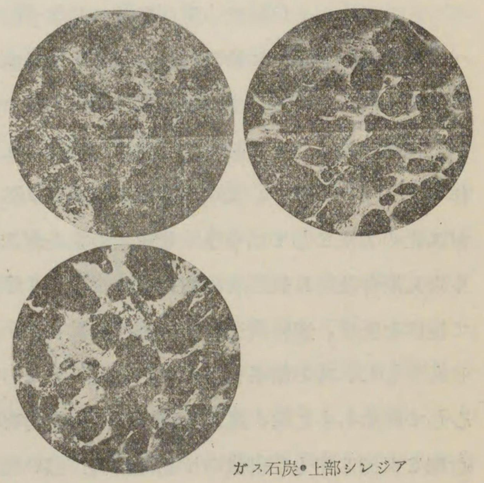


其時コツパース會社の技師でエンクナー（A. Jenkner）氏は特に此の研究に趣味を持つて居られた關係上私共をの其實驗室に入れて色々說明して呉れました事は非常に愉快を感じました。

以下述べます事は主としてエンクナー氏に依つて研究されたことを御話し申すのであります、研究が獨逸國で爲されたのでありますから比較するものが皆獨逸產の石炭になつて居り面白味が少いかと思ひますが內地炭に付ては大島博士や福田氏に依つて種々研究された結果が發表されて居りますから更に比較して頂けば結構と存じます。

こゝに示す一〇枚の顯微鏡寫眞の中第一圖は全部宇部炭を九五〇度てコークスにしたものを擴大したものであります、組織から見て非常に黑鉛化の少い事を述べ、且氣孔に富むことを示したのであります。第四圖は之と比較するため同じ大さに擴大したルール地方の石炭から得たコークスの顯微鏡寫眞であります、之は

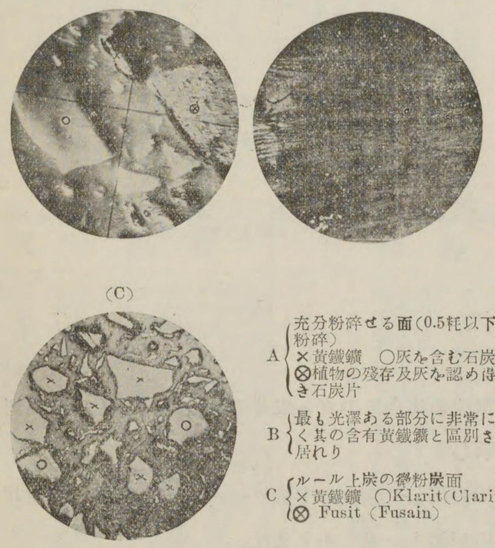
第四圖　ルール地方上炭より得たるコークス



ガス石炭・上部シレジア

組織の構成上非常に黑鉛化が多いものとしてあります。第五圖は石炭の微粒を擴大した顯微鏡寫眞でクラレーン、フユゼーン、鐵鑛分等の分布を示したものであります。

第五圖　宇部炭



第十表

宇部コークス反應性試驗

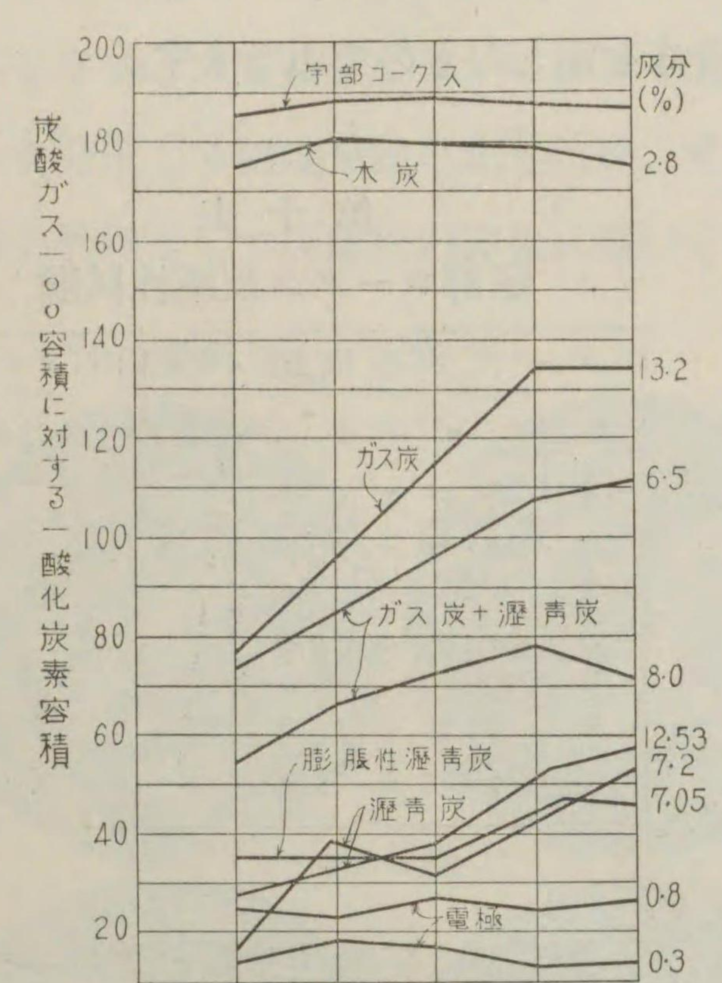
コークスの種類	電氣抵抗（オーム）
宇部コークス	2.000
ザールコークス	73[illegible]
ルールコークス	549
黑鉛	152
三六%の揮發分を有する石炭のコークス	716
ルールコークス	68[illegible]
上部シレジアコークス	928

第十表は反應性を測定する一つの方法として電氣抵抗に依つたもので抵抗の多いもの程黑鉛化の度が低く反應性が强いとされて居り、之はコークスを1・000－4・900メッシユに碎き一平方粍長さ一米、一平方糎當り一五〇キロの壓力の下に於て抵抗を測定したのであります、宇部コークスが 二・〇〇〇オーム近くもあつて他コークスに比較して遙かに高いことも注意すべき點と思ひます。

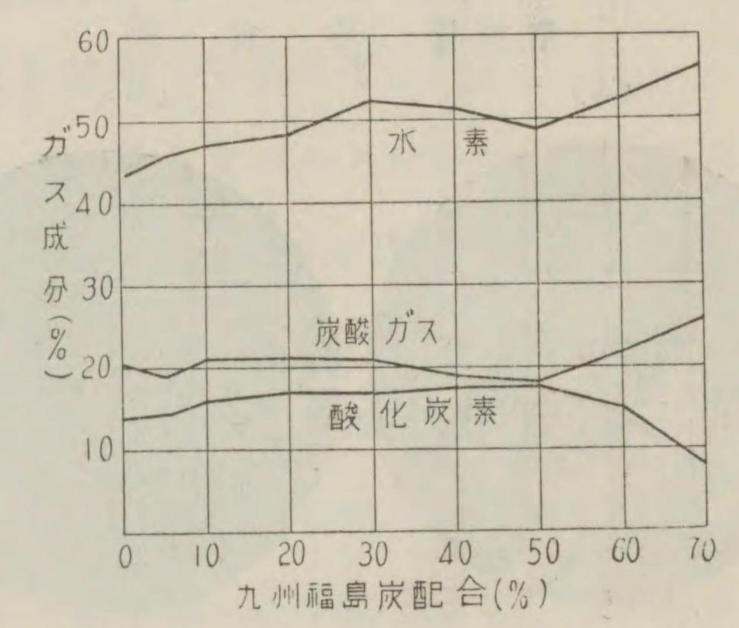
第六圖は普通の測定法で炭酸ガスを九五〇度で一酸化炭素に轉化した割合を曲線で示し他のものと比較したものでありますが、木炭より尙上位にあることが判ります。

宇部コークスが何故に斯く反應性が强いかと云ふ點に付ては種々の點から考察する事が出來る事と思ひますが、此の點は皆樣の御研究に任す事としまして宇部コークスを實際に使用して他のコークスを使用した場合とを比較して其の發生したガス成分が如何に變化して行くかと云ふことが吾々の事業には一番必要な問題であります、宇部窒素工業會社では竪型コークス爐に宇部炭を使用して下部から蒸氣を送入して居りますので非常に複雜な反應を爐內に起して居りますから、直樣之を以て反應性の如何を論ずることは困難かも知れ

第六圖　コークスの反應性（800°度）



第七圖　ガス爐に宇部炭と九州炭を混用した場合のガス成分の變化



ませんが九州炭を混入した場合と宇部炭單味の場合とのガス成分の比較は其の性能の判別の一助となる事と思ひますから第七圖を示します。

尚次に宇部コーライトを發生爐に單味で使用した場合と夕張コークスとを混用して使用した場合とのガス成分の變化を研究したのが第十一表であります。

第十一表　　宇部コークス使用による發生爐ガス成分の變化

區分 / 年月日	配合割合 夕張	配合割合 宇部	グレート下溫度		ガス成分（%） 炭酸ガス	炭化水素	酸素	一酸化炭素	メタン	水素	窒素
九年七月	50	50	65	平均	7.5	0	0.5	23.9	1.7	9.9	56.5
同	40	60	65	平均	7.8	0	0.5	24.6	1.1	12.1	53.9
同	25	75	65	平均	8.3	0	0.4	23.3	1.1	11.9	55.0
同	0	100	65	平均	7.1	0	0.3	26.0	1.1	13.8	51.7
十年一月	0	100	65	平均	3.7	0	0.1	30.8	1.0	12.8	51.6

要するに宇部コークスの反應性が特に強いと云ふことは是迄燃料研究所でも御話を承つて居たのでありますが、重複を厭はず具體的に申上げ更に進んで其の利用に付き御考へを願ひ度いと思ひます。

同四年	展時代		拓時代	宇部製炭株式會社（二十五萬圓）		
同五年		沖見初炭鑛創業（二百萬圓）			山陽製綿宇部工場設立	二〇、〇〇〇
同六年				宇部鐵工所増資（五十萬圓） 宇部紡績創立（百萬圓）	宇部輕便鐵道増資（三十萬圓）	
同七年				宇部電氣株式會社増資（百五十萬圓）		三五、〇〇〇
同八年					報德會創設 宇部商事株式會社創立（二十萬圓）	
同九年					宇部商工會創設	
同十年		東見初新坑開鑿			市制施行 石炭鑛業聯合會創立	四〇、〇〇〇
同十一年		沖ノ山東京出張所新設				
同十二年				宇部セメント創業（三百五十萬圓）	上水道工事着手	
同十三年		沖ノ山第二沖ノ山合併（資本金六百五十萬圓）		宇部電氣（百五十萬圓）縣營トナル	百十銀行出張所設置	
同十四年		沖ノ山大阪出張所設置			宇部銀行（二百萬圓増資） 宇部鐵道株式會社設業	
昭和元年	大成時代	沖ノ山横濱出張所名古屋出張所設置 東見初資本増加（三百二十五萬圓） 新沖山炭鑛創業（五十二萬五千圓）	發展時代	宇部紡織四十萬圓ニ減資	築港計畫成ル 西沖ノ山製材株式會社（廿五萬圓）	五〇、〇〇〇
同二年				宇部紡績ト改メ百五十萬圓増資	宇部電氣鐵道株式會社創業（六十五萬圓）	
同三年		沖ノ山株式會社ニ組織變更（千三百萬圓） 王子炭鑛創業		日本發動機油株式會社創業（二十萬圓）	元山商會創立 宇部海陸運送株式會社（十萬圓）	
同四年		長生炭鑛創業		第二發電所第一期工事完成 宇部洋灰資本金七百萬圓ニ増資		
同五年				日本發動機油株式會社増資（四十萬圓）	宇部港指定港灣トナル	六〇、〇〇〇
同六年		東見初、沖見初炭鑛ヲ買收 新沖山炭鑛本坑開鑿				
同七年					沖ノ山工業運河起工式	七〇、〇〇〇
同八年			飛躍時代	宇部琺瑯鐵器製造所創立 第二發電所第二期工事完成 宇部窒素工業創業（五百萬圓）	山口縣營宇部港修築工事始ム	
同九年		沖ノ山西見初鑛區其他買收		安來製鋼所宇部工場設立 宇部鐵工所増資（百十五萬圓） 日満マグネシユウム會社創立七百萬圓 日本苦汁工業株式會社創立 宇部紡績増資（三百萬圓）	工業用水工事竣工 宇部鑛業組合昭和會社加盟 渡邊祐策翁逝去	
同十年		東見初第二東見初鑛區買收 仝株式會社ニ組織變更（千二百萬圓） 沖ノ山炭鑛九州福島鑛業所ヲ始ム 宇部礦業株式會社創業		宇部セメント増資（千四百萬圓） 宇部窒素工業増資（千二百五十萬圓）	宇部港第二種重要港灣指定 元山運輸商事増資（百万圓）	
同十一年八月迄		小炭鑛簇出（宇部炭田ニ三十余坑アリ）		宇部曹達株式會社創立（七百五十萬圓） 日本硫酸株式會社創立 チタン工業株式會社創立 第二宇部窒素工業株式會社創立	沖ノ山同仁病院新築落成 工業運河成ル	八〇、〇〇〇

宇部鑛工業發展年譜

	鑛業	工業	關係事項	宇部人口
延寶年間	宇部炭田採掘起源（二百五十年前）			
文化年間	宇部炭鹽田ニ移出（百五十年前）			
天保十一年	南蠻車捲揚機發明（九十五年前）			
明治六年	日本鑛法發布サル			
同九年	舊領主福原公鑛業權ヲ獲得			
同十七年	宇部村民ニ稼行セシム			
同十九年	蒸杵ヲ發明海底採掘ノ基礎成ル			
同二十年	築島炭鑛創立海中作業創始			
同二十一年	宇部共同義會組織			
	石炭採掘ヲ農繁期ニモ行ヒ			
	蒸汽機關使用			
搖籃時代				
同二十三年	鑛業條例發布　石炭業發展ニ向フ			
同二十四年	宇部海底採掘創始（瀉炭鑛創業）			
同三十年	沖ノ山炭鑛創立（六萬圓）			
同三十一年	宇部鑛業組合成立			
同三十八年	沖ノ山炭鑛增資（八萬圓）			
同三十九年	沖ノ山舊坑開坑			
同四十一年	東見初炭鑛創業（八萬六千圓）			
	西沖ノ山炭鑛創業（百萬圓）			
同四十二年	炭鑛業ニ電力使用ヲ始ム			
同四十四年				
開拓時代				
大正元年	沖ノ山築島ヲ作リ現在地ニ稼行			
同二年	第二沖ノ山創立			
同三年	沖見初炭鑛創業（二百萬圓）			
同四年				
同五年				
同六年				
同七年				
同八年				
同九年	東見初新坑開鑿			
同十年	沖ノ山東京出張所新設			
同十一年				
同十二年	沖ノ山第二沖ノ山合併（資本金六百五十萬圓）			
同十三年				
同十四年	沖ノ山大阪出張所設置			
發展時代				
昭和元年	沖ノ山橫濱出張所名古屋出張所設置			
同二年	東見初資本增加（三百二十五萬圓）			
同三年	新沖ノ山炭鑛創業（五十二萬五千圓）			
同四年	沖ノ山株式會社ニ組織變更（千三百萬圓）			
同五年	王子炭鑛創業			
同六年	長生炭鑛創業			
同七年				
同八年	東見初、沖見初炭鑛ヲ買收			
同九年	新沖ノ山炭鑛本坑開鑿			
同十年				
同十一年				
大成時代				
同十一年八月迄	沖ノ山西見初鑛區其他買收			
	小炭鑛簇出（宇部炭田ニ三十余坑アリ）			

	鑛業	工業	關係事項	宇部人口
開拓時代				
同二十三年	宇部鐵工所（十萬圓）			
同二十四年	宇部製炭株式會社（二十五萬圓）			
同三十年	宇部鐵工所增資（五十萬圓）			
同三十一年	宇部紡績創立（百萬圓）			
同三十八年	宇部電氣株式會社增資（百五十萬圓）			
同三十九年				
同四十一年				
同四十二年				
同四十四年				
發展時代				
大正元年	宇部紡績四十萬圓ニ減資			
同二年	宇部紡績ト改メ百五十萬圓增資			
同三年	日本發動機油株式會社創業（二十萬圓）			
同四年				
同五年				
同六年	第二發電所第一期工事完成			
同七年	宇部洋灰資本金七百萬圓ニ增資			
同八年	日本發動機油株式會社增資（四十萬圓）			
飛躍時代				
同九年	宇部琺瑯鐵器製造所創立			
同十年	第二發電所第二期工事完成			
同十一年	安來製鋼所宇部工場設立			
同十二年	宇部鐵工所增資（百十五萬圓）			
同十三年	日滿マグネシユーム會社創立七百萬圓			
同十四年	日本苦汁工業株式會社創立（三百萬圓）			
同十五年	宇部セメント增資（千四百萬圓）			
同十六年	宇部窒素工業增資（千二百五十萬圓）			
同十七年				
同十八年	宇部曹達株式會社創立（七百五十萬圓）			
	日本硫酸株式會社創立			
	チタン工業株式會社創立			
	第二宇部窒素工業株式會社創立			

	鑛業	工業	關係事項	宇部人口
開拓時代				
同二十三年	宇部銀行創立（三十萬圓）			
同二十四年	沖ノ山築島完成工業地帶源			
同三十年	沖ノ山同仁病院開業			
同三十一年	宇部鐵道開通			
同三十八年				
同三十九年				
同四十一年				
同四十二年				
同四十四年				
發展時代				
大正元年	築港計畫成ル			五〇、〇〇〇
	西沖ノ山褐材株式會社（廿五萬圓）			
同二年	宇部電氣鐵道株式會社創業（六十五萬圓）			
同三年				
同四年				
同五年				
同六年	元山商會創立			三五、〇〇〇
同七年	宇部海陸運送株式會社（十萬圓）			
同八年				
同九年				
同十年				四〇、〇〇〇
同十一年				
同十二年				
同十三年				
同十四年				
飛躍時代				
同十五年	宇部港指定港灣トナル			六〇、〇〇〇
同十六年				
同十七年				
同八年	沖ノ山工業運河起工式			七〇、〇〇〇
同九年				
同十年				
同十一年八月迄	沖ノ山同仁病院新築落成			八〇、〇〇〇
	工業運河成ル			

705
68

宇部鑛工業發展年譜

	鑛業	工業關係事項	宇部人口
延寶年間	搖籃時代		
文化年間	宇部炭田採掘起源（二百五十年前）		
天保十一年	宇部炭塩田ニ移出（百五十年前）		
明治六年	南蠻車捲揚機發明（九十五年前）		
同九年	日本鑛法發布サル		
同十七年	舊領主福原公鑛業權ヲ獲得		
同十九年	宇部村民ニ稼行セシム		
同二十年	蒸杵ヲ發明海底採掘ノ基礎成ル		
同二十一年	築島炭鑛創立海中作業創始		
	宇部共同義會組織		
	石炭採掘ヲ農繁期ニモ行ヒ		
	蒸汽機關使用		
同二十三年	開拓時代		
同二十四年	鑛業條例發布 石炭業發展ニ向フ		
同三十年	宇部海底採掘創始（瀉炭鑛創業）		
同三十一年	沖ノ山炭鑛創立（六萬圓）		
同三十八年	宇部鑛業組合成立		
同三十九年	沖ノ山炭鑛增資（八萬圓）		
同四十一年	沖ノ山舊坑開坑		
同四十二年	東見初炭鑛創業（八萬六千圓）		
同四十四年	西沖ノ山炭鑛創業（百萬圓）		
	炭鑛業ニ電力使用ヲ始ム		
大正元年	發	開	
同二年	沖ノ山築島ヲ作リ現在地ニ稼行		
同三年	第二沖ノ山創立		
		宇部鐵工所（十萬圓）	
		宇部電氣株式會社創業（十萬圓）	
		宇部銀行創立（三十萬圓）	
		宇部輕便鐵道株式會社創設（十五萬圓）	
		沖ノ山築島完成工業地帶源	
		沖ノ山同仁病院開業	
		宇部鐵道開通	
			四、四六二
			六、〇〇〇
			七、〇〇〇
			一〇、〇〇〇

第二章　工業地帶としての宇部

① 自然的條件
- A. 石　　炭
- B. 原　　料
- C. 地理的條件
- D. 社會的便宜

② 人的條件
- A. 市民の鄉土愛
- B. 市民の勤勉
- C. 勞働問題

結　　語

產業は近代の經濟組織の複雜化と技術の偉大なる進步とに從ひ分業的に細分せられ其の細分したものが量的には集中して大規模となつて來て居ります。

此の過程に於て工業は自然的生產條件の有利な地方へと次第に集中して來る傾向が生じて來ました、然も此の一地域が他から工業中心地として特化されるとその集中自体の中に更に諸種の社會的便宜が派生して來てその地方の持つ條件は一層好化されて來るものであります。

扨て私は宇部を以て理想的な工業地帶であると考へ工業地帶の要件を一々宇部に當て嵌めて檢討して行かうと思ひます。

宇部が工業地帶として非常に優秀な地となり又それが認められて來て居る事は村から一躍市へと發展した事でも解かるのでありますが夫れは宇部がロケーションの點から申して斯くなるべき素質を多分に持つて居たと云ふに他ならぬのであります。工業の集中化をたどる細目的好條件は次に述ぶるが如くでありますが此を要約すれば卽ち自然的條件と人的條件と云ふことが出來ませう

1. 自然的條件

A. 石　　炭

705
58

石炭の埋藏されて居た事は宇部に與へられたる最大の自然的恩惠でありまして石炭は直接に間接に宇部を盛り立てゝ來た恩人であります。

1. 燃料としての石炭

ホフリンは石炭、鐵を以て凡ての產業の共通助成者であり且牽制者であると申して居ります。動力の源として又化學工業の母体として石炭が如何に重大なる役目を勤めるか更に又工業地帶形成に如何なる意義を有するかは今更喋々の要はありません。

石炭の工業に使用さるゝ量は石炭全需要の八〇%以上を占めて居る事を見ましても工業に影響する所の大なるを知り得るのであります。此の點から英國や北九州の工業地帶と同一意味を宇部が持つわけであります。

2. 金融關係より見たる炭鑛業

延寶年間から培はれた宇部炭鑛業は明治年間の開拓時代、大正年間の發展時代を經て、昭和年間に大成する迄地方主体產業としてあらゆる方面に先導者となりその利潤は化して他工業の基礎を形成しました、之れは宇部の先覺者たりし故渡邊祐策翁の先見の明ある工業政策によつたのでありますが炭鑛が金融上の道を開いてゐたと云ふ事は宇部工業の今日ある所以であります。

例へば翁は工業地帶への重要素因となる港灣を設けるためには沖ノ山炭鑛の利益金を特別に積立てゝ防波堤に當て新工業設立に當つては豫め沖ノ山炭鑛の株主を以て貯金組合を組織し其の配當の都度其の一部を貯金せしめて新工業への投資を便ならせしめ大財閥の**バック**も無き宇部がその創設に當り金融の圓滑を計る様な諸方策をとられた事であります。

B. 原　　料

1. 一 般 原 料

原料の產地又はそれに近い事は工業地帶としての一要件であります。此の點でも宇部は好條件を有して居ります。

石炭は硫安製造のための水素**ガス**採取の原料とし又**ベンゾール**其他石炭液化の原料として窒素工業に於て用ひられて居ります。

更に**セメント**は炭鑛の坑內より出る粘土を以て原料とし尙又石灰の產地にも近く便利な特點を有して居ります。

マグネシユームに用ふる苦汁は瀨戸內海の塩田から持つて來るのでその船舶の便と相俟つて絕好の地であり、更に**セメント**、**マグネシユーム**、鋼、窒素工業の副產物等が再び原料となつて活躍する餘地多く、此れ等原料の點から見るも宇部の重要性は見逃せぬのであります。

2. 電　　力

工業が高度化するに從つて次第に電力は工業に重要なる**モメント**となつて來て居ります宇部が粗惡炭を電氣に化して安い電力を供給することの出來るのは大なる特点で、今山口縣宇部第二發電所は五萬**キロワツト**の能力を以て山口縣下工業發展に資し、宇部**セメント**宇部窒素共に自家用發電に依り安い電力の利益を享けて居ります。

C. 地 理 的 條 件

1. 土　　地　（埋立）

理想的工業地としては廣大なる平地にして一般市街地と確然たる區劃を爲し、工場のみが一定の聯繫を保つて**ブロツク**を形成する事にあると思ひます。此の點では宇部は非常に自然に惠まれております。何となれば宇部は海に面してゐたのでその石炭と共に出る硬土を以て海面を埋立て新に思ふ儘の土地が出來たからであります、故に一般市街地と分離して工業地帶を作らうと云ふ計劃のもとに埋立てられた五十萬余坪の土地は港灣により、運河により、海に面し完全なる道路計劃、水道計劃と共に理想的な工業地帶を造りつゝあるのであります。

2. 港 灣 運 河

昔から大都市は皆水の邊りに發生しました、それは經濟上水運の便が陸運の便に優るためであつて、工業は特に荷役の便と運賃の低廉とが離るべからざるものであります。

此の點から宇部が瀨戸內海に面した交通の要點にあり、其港灣面積四十余萬坪且つ防波堤燈臺等完備し、然も昭和十年二月には第二種重要港灣と定められその存在價値が認められると共に、工業發展の助成者としての一役を分担してゐるのであります。更に西側の埋立地には運河を以て大汽船を岸壁に横着けにし近代的工業地帶として恥かしからぬものにせんと着々浚渫中であります。

705
58

3. 消費地との關係

宇部は鶴見川崎に於ける東京、大阪灣に於ける大阪の如き絶好の**ヒンターランド**には惠まれておりませんが、交通至便にして然も他に比すれば海路京阪の市場には近く、尙朝鮮及新興滿洲國に近いと云ふ事は力强い點であります。

日本は農本國の滿洲支那に對し、工業國として彼我の圓滑なる經濟關係を結び一大**ブロツク**として東洋經濟再建運動をとりつゝあるのでありまして、此の滿洲の將來を考へるとき滿洲は宇部工業の市場として或意味から大なる**ヒンターランド**と云ふ事を得ると思ひます。

然も日本の首と云はるゝ關門をひかへ此の蔭にある事は又一つの强味であります。

4. 其　　他

イ. 氣　　候

氣候は又文化產業の發展に大なる影響をなすものであります。此の點からも宇部は甚だ惠まれた土地であつて、冬雪を見る事極く稀でありまして、然かも夏はさして暑からず零度以下に下る事なく三十三度以上に昇る事なく、瀨戸內海に面し氣候は日本中にて最も良い所の一つでありませう。

ロ. 水

水は工業にとつて量並に質に於て留意すべきものであります。宇部は市の西端を流るゝ厚東川から水をとり工業用水として各工場に配給しております。此川の水量は夏 六〇·〇立方尺毎秒で、冬 六六·〇立方尺毎秒であります。

D. 社會的便宜

1. 補助產業

前にも申した樣に一旦工業が集中するとそこに發達する產業機關並に補助產業（鐵工業修繕業、製材所、建築業等）完備し工場設立を容易ならしめ、生產費節約低減を來すものでありまして工業地帶として、一層好化されて來るのであります。宇部も工業都市として認められたのは新しいが、その基礎は古くからこつこつたゝきあげられて來たゞけに補助產業の發達は相當見るべきものがあります。例へば宇部鐵工所其他に於ける機械工作修繕

業を初め細かく分化せしものゝ例として竹內鐵工所の如き**スチールボール**專門の工場さへ出來各地に移輸出するに至り、其他商工會議所、鑛業組合等の施設から、宇部銀行、百十銀行、船場銀行等の金融機關、宇部鐵道、宇部電鐵、元山運輸商事（汽船帆船）及大阪商船、尼ヶ崎汽船、宇和島汽船、の寄港による交通機關の發達、更に又宇部工業學校、長門工業學校等工場勤務者の養成等其の環境は最早工業地帶として動かすべからざる機構をなして居るのであります。

2. 生活諸設備

補助產業と共に從業員の生活に適した土地である事は又一面工業地帶の形成に必要であります、宇部は此の點からも他の殖民地的な工業地と異つて土地の人で鄕土の產業開發としてやつて來たのでありますから生活設備には考慮し、電氣、**ガス**、上下水道等の諸設備、工業俱樂部、市民會館等の各會合慰安の場所まで段々備つて來て、炭鑛附屬醫局から發達した同仁病院等の病院の設備迄間接に工業地帶を擁護して居ります。

2. 人的條件

A. 市民の鄕土愛

故渡邊祐策翁並に諸先輩が野に止つて宇部を現在迄築かれた事は實にその人格と愛鄕心の然らしむる所であつて、翁の指揮下に一糸乱れぬ統制がとれ、その沒後宇部が駸々乎として發展して止まぬのは翁に培はれた愛鄕心を中心として統制されておる爲であります。大抵の鑛山は他地方の人が投資して其土地から採掘して利益を生み夫れを他の大都市が消費し結局土地の出した利益は他へ吸收され、採掘が濟めば後は野となれ山となれ式で廢れて了ふ、云はゞその土地が搾取されて了ふ樣な例が多いのでありますが宇部にあつては之と少しく趣を異にし、宇部の人が宇部から生み出して宇部で消費し宇部を盛んにする樣に努力しております。發電所も水道も港もその初めはすべて宇部の人々が自分でどんどん作つて夫れを縣や市へ讓渡したり寄附したりしたのであります。宇部を發展させる爲の施設ならすぐ協力してやつてしまうと云ふ鄕土愛が又大なる原因の一つとして算へられるのであります。

705
58

B. 市民の勤勉

昔から宇部の人は勤勉であつて仕事が生活の全部であると申して良い位良く働く所であります。其の例證となるものに宇部特有の匿名組合の組織があります。之は別章で述べましたが此の勤勉さが現在の宇部を築く礎となつたものであります。卽ち市民が一致協同して各其の仕事を自分のものと云ふ風な考へから家族的に努力しておると云ふ勤勉さは宇部を現在あらしめた一大原因であります。

C. 勞働問題

近時の工場經營上最も考慮せねばならぬ事は勞働問題であります、之は重要なる社會問題であつて工業都市は常に此の問題に惱まされてゐるのであります。然るに山口縣は古來人情純朴、淳風美俗を以て誇とし維新に於ける長州藩の忠臣志士の光輝ある歷史が傳統的に尊王心と崇敬心を厚からしめ、知識階級は勿論勞働者にも行きわたつてゐます。此の事は山口縣に於ける勞働爭議が日本で最も少い地位に屬してゐる事からも知る事が出來ると思ひます。

殊に宇部は報德會によつて市民全体の統制が行きわたつており爭議に就ては殆んど經驗のない事からしても工業地帶として適した所であると云へやうと思ひます。

結　　語

斯くの如く宇部は自然的條件、人的條件共に惠まれ、然もそれを人工的に活かす爲にあらゆる努力をして現代工業都市宇部は生れたのであります。

宇部產業の生みの親渡邊祐策翁の理想は卽ち我宇部の理想でありまして翁は常々有限なる石炭から受けた恩惠をその時代の宇部の人が獨占してはならぬ、丁度太古の太陽が太陽熱を石炭に轉化して現在我々の生活を保持して呉れたと同樣に、現在の石炭の恩惠は將來の工業に轉化せしめて將來の宇部を建設せねばならぬと考へられておりました。此の大方針こそ故渡邊翁から繼承して來た我々のモツトーであります。

此の意味に於て埋立をなし港灣運河を築き水道を設け、發電所を設け、工業都市たるに充分な施設をなすと共に紡績、セメント、窒素肥料、發動機油、曹達等の工業を起したのでありまして、更にその利便を慕つては日滿マグネシウム會社、安來製鋼所、日本硫酸、チタン工業等が宇部に工場を設ける樣になりやゝ工業地らしい姿を見せて來たのであります。

第三章　宇部に於ける特殊企業形態

（宇部式匿名組合）

1. 序

僅か百年の間に封建時代から高度資本主義時代へ飛躍した日本は產業にも其に伴つて非常な飛躍を見せました。從つて企業は分化しその細分された一單位の規模は逆に極度に擴大され、勞力の擴充、資本の增大が要求され、從つて企業組織もそれに應じて變化して行つたのであります。かくて永い歷史を有する個人企業では大きくやつて行けず、個人の資本のみでは最早不充分と成つて來て多數人の資本を合せて一個の獨立した個別資本として機能する事を必要とし、共同企業の形態——組合、合名會社、合資會社——が生じたのであります。然し暫くたつと此等も資本の結合に限度があつて間も無く次の形態に其道を讓らねばならなかつたのであります。そこでは企業は產業資本家の遊離資本並各階級の貨幣を掻き集めて社會の資本として生產を營む樣になり、從つて所有と經營とが分離してこゝに所謂株式會社組織が生れたのであります。

宇部は斯かゝ企業形態の必然的進化を經濟上之と同一の働きをなしつゝ同一の軌道に依つて發展を遂げて來た處の宇部式匿名組合を以て置き換へて來たのであります。而して何故に斯かる形態が生じたかと申しますと元宇部の企業は宇部の人のみが企業し他地方の人が這入らなかつたので外部とは離小島的に交涉が薄かつたし、經濟上必然的に來る斯る進化過程を切抜けるために外部はそのまゝの形態で內部的改善のみを以て處置をし又せざるを得なかつたに依るのであつたと思ひます。夫れ故に此の組合組織はこの發展の歷史を反映しております。

私は此の宇部の特殊な企業形態に就て少しくお話したいと思ひます但し此の企業形態は石炭鑛業が主で遲れて起つた工業は大抵株式會社組織であります。

（二）　宇部式匿名組合組織の歷史

舊藩時代には地下の鑛物は藩主の所有と規定されて居り農閑期に自家用燃料として其の採掘を許可されて居りましたが、文化の頃瀨戶內海沿岸の鹽田に需要せらるゝに至り少しく規模の大なるを要し村民相より僅少の資金を醵出して一種の匿名信用組合を組織しまし

705
68

た、然して別に勞働者を使用せず各自心得ある仕事に從事し恰も家族的な事業の感を呈するものがありました。之が宇部式組合組織の濫觴であります。然し之迄は資本も勞働も組合員が出すものであり資本家と企業家並に勞働者とは分離して居りませんでした。

當時は農耕の餘暇を以て採炭するに過ぎなかつたのでありますが、明治二十年頃には農繁期に至るも事業を休止せず年間通じて採炭する様になつて以來漸次事業が進展し多額の資金を要するに至りました。然し尙其の出資株口は三十口より五十口を越えず、その事業はその中心人物を頭取と稱しその者へ一切の權能を委ね、その指揮下に働いて居りました卽ち事實は民法上の組合の如く共同事業であつて法律上は商法の匿名組合として頭取個人名義の事業に出資した事になるのであります。此の頃迄に經營者と勞働者との區別も次第に出來て來たのであります。

明治二十三年以降石炭業は益々發展し規模も擴大され、從來の如く少人數では事業の經營困難となり更に又多額の資本を要する様になりました。

こゝに出資者にして直接事業に參與しないものからも資本を蒐集する必要を生じ斯る組合員を隱歩と稱して廣く資金を蒐集しました。此の株口に對しては株式會社の株券と類似せる組合券を發行し然も匿名組合には許可せられざる持分の讓渡を認める点は民法の組合の如く、それが宇部の市場に賣買され流通する事恰も株式會社の株式の如くでありますが最も重要なる点は斯の如く株式會社の株と同一性質を有しながら株主は有限責任でない事であります。之が爲め頭取の信用は重大なる事でありました。

又明治三十年創立された沖ノ山炭鑛には組合規約として株式會社の定款類似のものが出來之が一般的に廣まりました。元來匿名組合は契約書や規約を必要としないものでありますが之の点は甚だ株式會社に類似して居るのであります。

斯くの如くして次第に企業の規模擴大し事務員の數も百名を超え組合員も亦數百名を數へるに至り、資本金も明治三十年の沖ノ山創立が六萬圓、明治四十一年の西沖ノ山炭坑が百萬圓、大正十三年沖ノ山炭鑛の資本が六五〇萬圓と云ふ様に年毎に增大して來ました。

斯の如く資本增大し規模擴大さるゝも尙組合組織をとり得た事は組合の內容の變化が時勢に應じて變化して行つたからでありまして、斯る組合に於ては今尙其の中心人物を頭取と稱し事業上一切の權能を委ね事務員の多數は其の組合員にして頭取を家長として其傘下に家族的に結合し、炭鑛よりは賄を給し朝夕食卓を共にし和氣靄々の裏に事業に精勵して居ります。而して給料の如きも現在尙上下を通じ僅少なる同額の日給（最近六十錢）に甘じ主なる收入は賞與として利潤に均霑する様になつて居ります。

斯の如き獨特の事業組織は炭田の開發と共に發達して人材も自ら育成され、此の大事業を殆んど宇部の財力と人物とに依つて經營して來たのであります。

（三） 宇部式組合組織と他企業形態と比較

宇部のこの組合は永い習慣に依つて出來上つたもので或定められた形式に當て嵌められたものでないために此の說明は甚だ困難であります。それは民法の組合又は商法の匿名組合でもなく、株式會社では勿論ないのであります。法律的には總べて匿名組合として取扱はれて居り、經濟的には組合並に株式會社の如く取扱はれて居ります。今私は宇部式組合の制度につき得失の二三を他と比較して見ませう。

1. 企業の主体

此の組合の企業の主体は誰であるかと云ひますと法律上匿名組合であるので頭取個人です、卽ち個人企業者頭取に對して出資するのであります。

夫れ故に株式會社の如く一切の登記を要しないために組合の內容は祕密的になり勝ちな缺點があります。且つ其の出資は株式會社の關係と異り純然たる內部關係でありまして信用の利用上株式會社に劣る所があります。

又匿名組合であるがために形式上は共同事業でありません、卽ち民法の組合と趣を異にするのであります。民法上の組合は外部に對して一團体をなすものですが匿名組合は純然たる內部の契約關係で毫も團体性を有しないのであります。所が宇部の組合は法律上は個人の企業ですが歷史的に見るも亦事實上から見るも甚だ強い一團体としての組合で事實組合員は株式會社の株主以上に出資にも仕事にも關與して居るのであります。

2. 株の讓渡

匿名組合は契約でありますから民法の組合の如くに持分の讓渡又は組合員の變更を認むる事を得ない様になつて居ります。然るに宇部の組合は此の持分を株口と稱し組合券卽ち株券を發行して居ります。此の點は非常に進んで居りまして株式會社の株式の如く宇部近

705
58

隣の市場に流通する點は少しも變りがないのであります。此の點資本を一般から吸收するに非常に役立つたわけでありまして五百萬圓以上の組合が出來たことが證據であります。

3. 有限責任

匿名組合は他人の營業のために出資する契約で組合共同の營業ではないのであります故に法律上は頭取個人企業で頭取のみが無限責任を負ふ樣ですが實は組合契約で此を制限してありまして「若し事業上損失を生ぜし場合に於ても其株數に應じ之を負擔するの責任あるものとす」と云ふが如き規約があるのであります。企業が大規模になるために資本の增加と勞力の補充を要し企業形態が個人企業から共同企業夫れから株式會社と變化する過程から考へて見ると此の組合は合名會社等よりは株の賣買の容易なる事及實權が少數の人に移つてある點に於て株式會社に近いのでありますが無限責任から有限責任に移る點では株式會社の領域から一步手前に止らざるを得なかつたのであります。

結　　語

個人企業から高度の株式會社迄の間を繋いだ宇部式組合もその企業資本の增大につれて資本の調達、信用上に於ける優越性、危險の分散等の點から株式會社に比し劣るのであります。殊に法律上に於ける立場からして信用の附與が受け難い事は株式會社より更に劣る主なる點でありまして離小島だつた宇部村が宇部市となり、更に日本の宇部、世界の宇部とならんとする今日漸次組織變更の止むを得なくたつた重要なる理由でありませう。

斯くて沖ノ山炭鑛は昭和三年に株式會社になり、東見初炭鑛も昭和十年末に株式會社組織に變更致しました。

然し沖ノ山が株式會社變更の時は六五〇萬圓、東見初が四八七萬五千圓、かゝる組織で此位の資本を運轉して居る所は他に無いと思ひますが、此以上の發展には宇部式匿名組合は最早不適當であると考へられます。

第四章　宇部の工業發展史

宇部の發展は石炭鑛業より初まつた事は勿論でありまして、之れを外形的に見ますと大体次の如く分け得ると思ひます。

鑛　　業

1.	搖籃時代	明治二十三年以前
2.	開拓時代	明治二十三年より明治年間
3.	發展時代	大正年間
4.	大成時代	昭和年間

搖籃時代　延寶の昔に發祥した採炭業は二百年の間に遲々として陸上炭田を採掘して來ました。維新直後は鑛業權所有者は領主であつたのが、明治五年鑛山心得、同六年日本坑法發布せられて以來届出による斤先掘をする立場にありましたが明治九年福原芳山公は鑛業權を回收せられて採掘を宇部の人のみにやらせました。更に下つて明治十九年宇部村に共同義會を組織し福原公より其の鑛業權を讓受け採掘の統制をすることになりました。此の時代はすべて小規模で炭坑の數のみ多く、明治五年以降八十の炭坑企業が營まれました由であります。

開拓時代　明治廿三年に改正鑛業條令が發布せられるや鑛業權の出願が一般に自由となり他村より出願するもの續出し爲めに石炭界混亂し一面にはこが石炭業の發展の動機になつたのであります。翌廿四年には潟炭鑛創立され初めて宇部で海底採掘へ進展し海陸兩方面に多數の炭坑が開かれて來たのであります。

主なるものとしては、神原、沖ノ山、西沖ノ山、東見初、鵜島等の諸鑛がありました。その間に日露戰爭がありまして中小炭鑛が最も多く出來た時代であります。

發展時代（大正年間）　沖ノ山炭鑛、西沖ノ山炭鑛等は此の時代の初めに海中へ築島を作つて稼行し、東見初も亦新坑を開鑿しました。尙此間世界大戰勃發し石炭の年產額も五〇萬瓲から一五〇瓲へと三倍の飛躍をしました。

大成時代（昭和年間）　此の間漸く陸地の中小炭鑛は其採掘炭田の量を減じ自然廢坑の止むなきに至り僅に殘炭掘として各所に小炭鑛を營む程度になりましたが只海底炭田採掘として沖ノ山炭鑛、東見初炭鑛のみは世界に於ても有數なる發展を來し合計して二百萬噸內

705
68

外を年產とする様になりました。同時に沖ノ山炭鑛、東見初炭鑛は株式會社に組織を變更し、各所に出張所を設け販路を擴め運搬は帆船より汽船に移り社有船を運航するに至り宇部全体の出炭量も前時代の百五拾萬瓲から二百五十萬瓲へと增加したのであります。殊に昭和十年以降景氣の上昇につれ小炭鑛簇出し現在三十位の小炭鑛があります。

（別紙年表御參照願ひます）

工　業　工業も亦大体次の様に其の發展年代を分けることが出來ます。

開拓時代	大正年間
發展時代	昭和年間
（飛躍時代）	昭和八年より

宇部の工業の發展は工業地帶としての宇部の章で述べました様に自然的條件と人的條件と相俟つて工業地として絕好となつたのでありますが、特筆すべき事は渡邊祐策翁が石炭採掘に依る利益を將來の宇部市民に工業の形として殘すと云ふ大理想であります。此の翁の理想に從つて工業發展に第一步を踏み出したのは大正六年の宇部紡績會社であります。此以前に電氣會社、鐵工所の創業がありますが補助產業としてのもので規模も誠に小でありました。大正十二年にはセメントが出來、兩社共景氣の變動で相當苦難の歷史を經て昭和に入り次第に工業が盛になり、昭和七年以來のインフレーション並に軍需景氣は埋立地面の增大利用に伴つて諸會社の創設增資を促し、窒素工業が出來、マグネシユーム、曹達チタン、等續々と工場が建てられ華かに工業發展へ進展して來たのであります。其の發展經路は別表を御參照願ひます。

第五章　宇部主要諸會社概況

1. 炭鑛業		沖ノ山炭鑛株式會社
		東見初炭鑛株式會社
		（新沖山炭鑛組合）
		（宇部礦業株式會社本山炭鑛）
		（長生炭鑛組合）
		（見初新鑛組合）
		（其他二十余鑛）
2. 紡績業		宇部紡績株式會社
3. 窯業		宇部セメント製造株式會社
4. 化學工業		
	肥料工業	宇部窒素工業株式會社
	曹達工業	宇部曹達工業株式會社
	輕金屬工業	日滿マグネシウム株式會社
		日本苦汁工業株式會社
	染料工業	チタン工業株式會社
	硫酸工業	日本硫酸株式會社
	ガス工業	宇部市營瓦斯
5. 電力工業		山口縣電氣局第一第二發電所
6. 製油業		日本發動機油株式會社
7. 機械工業		株式會社宇部鐵工所
		國產工業安來製鋼所宇部工場
		竹內鐵工所
		（其他）
8. 琺瑯工業		合資會社宇部琺瑯鐵器製造所

705
58

(1) 炭　鑛　業

宇部炭田は山口縣宇部市一圓並に其の海底にかけて擴がり．延寶時代より採掘が始まり文化文政の頃から多少外部に販賣され．明治二十年頃から海底へと延びて來ました。現在では陸地は大体掘つて了つて主なる炭鑛は全部海底採掘と申しても宜いのであり僅かに陸地の殘炭採掘が殘つて居るに過ぎません

現在宇部地方の總出炭量は

沖ノ山炭鑛		120 萬噸
東見初炭鑛		80 萬噸
新沖山炭鑛	其他計	40 萬噸
宇部礦業本山礦業所		
見初新坑		
長生炭鑛		
計		240 萬噸であります。

地質炭層　夾煤層は秩父古生層及花崗岩床の上に成層せる第三紀層でありまして．沖積層で被覆せられて居ります。然して之に介在する炭層は14層を數へる事が出來まして其の中主要なるものは一重石（2尺5寸）二重石（1尺4寸）大派（5尺5寸）五段（3.5—4尺）袴腰（1.5—2尺）三尺の六層であります。傾斜は南約三度の緩勾配で平野より海底に入つて居り．目下主なる稼行箇所は海底下150—600尺の範圍でありまして舊海岸線を距るゝこと1.000間から4.000間の間で東見初の眞卸大通は 3.000間即ち一里半。沖ノ山が2.600余間迄延びて居ります。

宇部炭田の特徴と欽点

海底採掘の關係上大通延長が長くなる事が相當技術的苦勞の種でありまして通氣及運搬の困難が將來の宇部炭田の壽命を左右するのであります。然し此に反して宇部炭田に有利な點も少くないのでありまして

1　傾斜が平均約三度なる事
2　炭塵や爆發瓦斯が少く作業に面倒の少い事
3　坑內が傾斜少きためにエンドレスによる運搬能率のあがる事
4　海底の採掘でありながら海水の漏洩無く揚水の高さ低く馬力を要せざる事
5　坑元より直に船舶にて輸送し得る事
6　炭質が半無煙で家庭用炭として相當の價格が維持せらるゝ事

炭　質　用　途

宇部炭は一名元山炭と稱し種々の特徴を有しておりまして火付が容易で煤煙淡く臭氣少く火持良く焚落となつてしかも火力が強く殆んど木炭と同一性能を有し更に又粘結性の無い炭であります。

此等の点から家庭用にはつとに京濱京阪方面に名高く又塩田用炭としても全國の半數は宇部炭が占めておる有樣であります。

採　炭　法

竪坑及斜坑開鑿法は昔から宇部特有の技術として「斜坑蒸し」「竪坑蒸し」捲揚機には「南蠻車」と言ふものが有りますが此は割愛します。

炭層は淺いにも拘らず全部長壁式採掘が出來．切羽にコンベヤー．片盤にテールロープ捲を使用する樣になりました。沖ノ山では丁度採炭の半分をコンベヤーを使用し共上作業をやつて居ます。

電氣オーガー鐵枠等を使用して居ますがカツターやビツクは炭質上不適當でありますから多少例外はありますが余り使用して居ません。

選　炭　法

選炭には特に力を盡して居り塊炭は沖ノ山東見初共各々五台のビツキングテーブルに熟練せる多數の選炭婦をつけて撰分けております。尙粉炭は大抵此を水洗機にかけております。

貯　炭　積　込

貯炭場は沖ノ山一萬六千噸．東見初一萬二千噸のものを有し．更に積込機は沖ノ山では特に塊炭の割れぬ樣なスキツプを有するトランスポーターを有し粉炭はベルトにより積込み．東見初は一時間四百五十噸ベルトコンベヤーに依り積込をして居ります。同時に積込に必要な灣灣設備には早くより意を用ひ．宇部港修築の設計を立て約百萬圓をかけて防波提を築き引續き指定港として縣當局に於て完成を急いでおり．昭和十年第二種重要港灣に昇格しました。尙東見初炭鑛は別に獨立して海岸埋立地を利用し水面積 35.00坪の石炭荷役港を築造しております。

石炭配給の爲には昔は主として帆船のみでありましたが最近は汽機船を所有して市場へ送つて居ます尙ほ

鑛業統制機關としては宇部には宇部鑛業組合があり．生産統制は石炭聯合會に加入し．販賣統制は沖ノ山東見初及新沖山が昭和石炭に加盟して居ります。

此の宇部地方の石炭鐵業に關して特に御話し申すべき事としては其の特別な經營方法が有りますが此は特殊企業形態宇部式匿名組合の項で述べたものであります。

こゝには市內の重要二炭鑛だけを御紹介致します。

705
58

◎ 沖ノ山炭鑛株式會社

資本金	1.300萬圓
出炭年	120萬瓲
鑛區面積	1200萬坪

當社は渡邊翁が設立育成せられ・一面渡邊翁の理想の實現に邁進して來た炭鑛で・五千人の鑛夫三百名の職員を擁し・生産に選炭に貯炭積込に進歩せる機械施設を有し・其生産高は本邦第五位に在ります別に九州には福島鑛業所を有し現在約十萬瓲の出炭を成し・配給設備としては東京・大阪・名古屋・高松に夫々出張所を有し大阪には大貯炭場を設け汽船を所有して万全を期して居ります。

本坑の衛生施設としては同仁病院を經營し・福利教化施設も夫々完備して居ります。

◎ 東見初炭鑛株式會社

資本金	1.200萬圓
出炭年額	80萬瓲
鑛區面積	1341萬坪

當社は明治四十一年創業され現在三千九百名の稼働者を擁し宇部屈指の大炭鑛でありまして・採掘・選炭・貯炭・積込配給・の諸設備完備し・別に港灣を有し三千噸級の汽船の出入自由であります。販賣には本社營業部の外東京・大阪・名古屋・高松に出張所を設け・昭和石炭株式會社の統制の下に合理的販賣をなし・勞務管理及社會施設については特に力を用ひ・大家族主義の下に勞資協調の實を擧げ順調なる發展を遂げつゝあります。

× × ×

其他日產系の宇部鑛業株式會社(資本金350萬圓)本山鑛業所は昭和十年設立され宇部市外元山半島から沖に掘進して居り・十一年下期より採掘にかゝり將來期待されて居ります。又新沖山炭鑛は宇部の西隣小野田にあり年產二十萬瓲現存せる組合としては一番大きく資本八十余萬圓。長生炭鑛は宇部の東隣床波に・其他小炭鑛は宇部を中心として一圓に二十有余坑を數ゑ得るのであります。

(2) 紡績業

◎ 宇部紡績株式會社

前に述べました石炭鑛業を他事業へ轉化すると言ふ渡邊祐策翁の理想を第一に實現したものが此の紡績會社であります。當社內の人の和はその勤勉と相俟つて今日の隆盛を見たのでありまして・機械は何れも最新式優秀な紡機を用ひて居ります。

現在資本金は3.000.000圓で內拂込資本金は1.875.000圓

紡機は109.208錘で一工場當り生產能力に於ては本邦屈指の工場であります。

今創業以來の歷史を見ますと

大正六年三月資本金1.000.000圓　匿名組合宇部紡織所を以て生れ・同年六月組織を改めて宇部紡織株式會社となし・豐田式廣巾織機96台の設備を完成し織布業を以て營業を開始しました。越えて十三年五月**ドブソン**式紡績機10.352錘の整備を遂げて紡織を兼營することになりました。其の間織機は逐年增設せられて遂に總數296台に達しました。

其後大正十五年十二月迄に資本金の增減を行ふて總資本金を1.500.000圓に整理し商號を宇部紡績株式會社と變更し織布業を全廢しました。同年七月紡機12.400錘の增設運轉を行ひ・更に三年八月10.000錘四年六月20.304錘の逐次增設を續行して爰に全工場53.056錘の電化單獨運轉の設備を完成したのであります。

爾來世界綿業界の趨勢と我國紡績業の推移に鑑み更に昭和九年九月資本金1.500.000圓を增加して總資本金を3.000.000圓（內拂込資本金1.875.000圓）となし昭和十年十一月を期し最新式紡機56.152錘の充實設備を終り・總數109.208錘を以てする一工場單位の完成を見たのであります。

其の設備は工場坪數5796坪　從業員數は約1150名であつて

製產額は	綿糸	二〇番手	19.170梱
	同	四〇番手	18.300梱
	計		37.470梱
	紡機		109.208錘

原料は米國棉及印度棉を併用し阪神方面から購入して居り　製品は專ら**チーズ**卷絲として大阪・名古屋・泉南地方へ販賣し大阪には出張所を設けて居ります。輸送は汽車及船舶積として居ります。

(3) 窯業

◎ 宇部セメント製造株式會社

當社は大正十二年地方產業開發を目的として資本金三百五十萬圓を以て創立・直に工事に着手し仝十四年四月年產四拾万樽の能力を有する乾式廻轉窯一基を据付完了しました。

原料は對岸福岡縣恒見產石灰石及隣接沖ノ山炭鑛內頁岩を充て・石炭は宇部炭に少量の九州炭を併用し仝年仝月初めて製品の發賣發送を開始しました。翌十五年九月乾式窯一基を增設年產能力百万樽・昭和三年十二月には資本金を倍額金七百万圓とし仝五年二月長さ三百三十尺直徑十二尺實に東洋一の稱ある濕式窯二基を据付完了・年產能力は從來の乾式と併せて二百五十万樽となりました。

仝六年一月超高級**セメント**の製造を開始・七年十二月には宇部大派微粉炭による自家用發電施設を完成し工場用全動力を自給することゝなりました。

翌八年一月には濕式窯一基を增設續いて仝年九月乾式窯二基濕式窯二基の擴大改造を加へ年產能力四

705
68

百六十万樽となり更に翌九年三月乾式窯一基を增設仝年八月「スラリーフキルター」付濕式窯一基增設

茲に長大新鋭の燒窯乾式三基濕式四基合計七基となり年產能力五百五拾万樽を數ふるに至りました。

仝九年十二月資本金を倍額金壹千四百万圓に增資し十年七月濕式窯三基に「カルシネーター」を裝置翌十一年五月「シリカセメント」及「黑色セメント」の生產を開始. 年產能力六百五拾万樽に達し單一工場として本邦に於て一二位を爭ふ大工場となりました。

又當社は輸送の合理化に依る運賃の低減を期する爲本邦最初の計劃たる「セメント」の「バラ積」輸送を企圖積載噸數三千五百噸の「セメントタンカー」船清忠丸及主要需要地へ「タンク」を建造し十一年五月より運航を開始して業界の注目する所となつて居ります。

操業以來躍進又躍進僅々十一ケ年の間に生產能力は實に十六倍に增大し同業二十六社中三四位に達したのであります。

十一年二月朝鮮に創立せられました資本金六百萬圓の朝鮮セメント株式會社は大部分當社の投資によるものでありまして黃海道海州に年產能力約三百五拾万樽の工場を建設中でありますが十二年春完成操業を開始することになつて居ります。

尙當社工場が原料燃料の產地に近く且海岸に接し製品の出荷にも三千噸級船舶の橫着可能にして海運の便に惠まれてゐることはセメント工場として最も優れて居る所であります。

一方經營方面は最も堅實にして業績比年向上し生產單位當固定資產の低廉なることは旣に定評のある所でありまして將來の發展見るべきものがあると思ひます。

從業員數は職員百名職工四百五十名人夫二百名であります。

製品は普通セメント. 超高級セメント. シリカセメント. 硅酸セメント. 黑色セメント何れも好評嘖々で販賣には本社の外東京. 大阪. 京城の各地に出張所。全國各地方に約九十余の特約販賣店を設け販路は內地各地方は勿論朝鮮. 臺灣. 滿洲. 南支. 南洋. 印度. 阿弗利加. 南米に及んで居ります。

(4) 化學工業

(A) 肥料工業

◎ 宇部窒素工業株式會社

當社は硫安製造及其副產工業を目的として昭和八年四月資本金五百萬圓を以て創立せられ直ちに建設工事に着手翌九年七月より製造を開始いたしました。續いて擴張工事に着手し昭和十年十二月之れを完全し現在の製產高は

製品（年產）	主製品	硫酸アンモニア	100.000噸
	副產物	コールタール	4.400噸
		ベンゾール	700噸
		コークス	18.000噸

ソルベントナフサ	300噸
ナフタリン	100噸
副生硫酸アンモニア	1.500噸

當社は本邦最初の石炭を原料とする硫安製造工場であります。建設工事着手後僅々一年の短日月を以て第一期工事を完成しました。即ち石炭瓦斯より水素窒素分をリンデ法に依り分離しフアウザー式により兩素合成を行ひ正に現代科學の粹を集大成したもので本邦に於て最も進步した工場として折紙を付けられて居ます。且つ工場は海陸交通の要衝に位置し原料たる石炭は間近の沖の山炭鑛より供給を受け潤澤なる工業用水を得る等ロケイシヨンの利は嶄新なる機械設備と相俟つて生產原價の低減は斯界注目の的となつて居ります。同社は業界の情勢を洞察し再度增資を敢行して資本金總額を 7.500 萬圓となし第三期建設工事に着手し昭和十二年下期には完成の豫定で工事を進めて居ります。之が完成の曉には硫安年產20萬噸となる譯で其の飛躍洵に刮目に價するものがあります。

茲に特筆すべきは同社が多年研究を重ねた結果敢然として石炭瓦斯法を採用し百パーセントに所期の目的を達成し本邦最初の石炭瓦斯法に依る工場を完成したことであります。硫安は自給自足の域を越えて輸出に轉ずるの日も遠くないことであり其の時こそ同社の持つ强味を發揮し其武器たる低廉なる生產コストを以て斯界に雄飛するであらうことを期待し得るのであります

(B) 輕金屬工業

◎ 日滿マグネシウム株式會社

近年盛になつて來た輕金屬工業の一として沖ノ山炭鑛の橫手の埋立地に日滿マグネシユーム株式會社宇部工場があります。資本金は七百萬圓. 年產四百噸の金屬マグネシユームを製造して居りますが。昭和十一年十月には擴張して千噸生產の豫定であります。

此の製法は瀨戶內海の塩田より生ずる苦汁を原料とするほか滿洲のマグネサイトをも用ひるのであります。前者は財團法人理化學研究所. 後者は滿鉄中央試驗所で研究され全然我國獨特の學術的產物として純國產の製法で其の原料も亦悉く日滿兩國產のものを用ひ一切外國產のものを使用せぬ方針の下に理研の分が先づ工業化され昭和六年其製品が出ました。

日滿マグネシユーム株式會社は此の理研マグネシユーム會社の工場（新潟縣直江津町）を繼承し. 昭和八年十月會社創立以來引續き製造を進めて居りましたが滿鐵中央試驗所發明の製造も之を實施する關係もあり工場の位置に愼重調査の結果凡ゆる關係から宇部を最適地と認められて昭和九年七月起工十年七月より運轉を開始しました。

◎ 日本苦汁工業株式會社

日滿マグネシユーム株式會社宇部工場に隣接しその附屬工場として苦汁工場があります。資本金四十

705
58

萬圓で金屬マグネシユムの原料たる塩化マグネシユムの外に塩化加里等を供給するのが主なる事業であります。即ち瀬戸內海塩田に於て生産せらるゝ生苦汁を處理し．上記の塩化マグネシユム及塩化加里の外に副産塩．苦汁加里．臭素．石膏等の製品をも得。副産塩は專賣局に上納し其他は此を販するのであります。

(C) 曹達工業

◎ 宇部曹達工業株式會社

當社は昭和十一年創立され東見初炭鑛の横手埋立地に工場を設立する事となり直ちに工を起し十二年八月から製品を出す豫定であります。

製法はアンモニア曹達法で第一期には曹達灰．日産二百瓲．苛性曹達百瓲の豫定で將來前者を六百瓲後者を三百瓲に增産の豫定であります、

原料の粗製塩は支那．滿洲．アフリカより輸入し．一ケ年14萬瓲（將來42萬瓲）石灰石は大分縣津久見及山口縣大嶺のものを約14萬瓲（將來41萬瓲）使用し．アンモニアは宇部窒素工業會社より供給を仰ぐ豫定であります。燃料は當社が東見初に近いので石炭の供給は便利であり。電氣も宇部大派炭の微粉燃燒で自家發電をして．その廢蒸氣の利用と相俟つて低廉に使用し得ると思ひます。

曹達工業は近時一般製造工業の發展につれ殊に人絹．ステープルフアイバー等の人造纖維工業の發達隆昌に伴ひ需要激增し販路の增大が豫期されて居るのであります。

(D) 染料工業

◎ チタン工業株式會社

當社は昭和十一年六月國產工業株式會社と獨乙IG染料會社との共同出資のものと資本金百五十萬圓を以て創立せられました。工場は沖ノ山埋立地に建設中でありまして。工事竣成は昭和十二年早々營業開始は仝年二三月頃の豫定であります。

製品はチタニウム白色顏料を主とし。第一期計劃に於ては年產二百五十萬圓を生產するものであります。製造法は所謂ノルウエー法で．米國ナショナルレツド會社及獨乙IG會社改良の分に依るのであります。

チタン顏料は他の白色顏料に比して幾多の特長を有し。不透明度强く耐久性に富み．分子が微細で比重輕く．人畜無害無毒にして絕對不干涉性で決して他を冒し又他より冒さるゝ事無く良く他の顏料及藥品と混物する爲に此の新顏料の應用範圍も日々擴太され需要量も年々遞增の趨勢にあります。此の應用範圍の主なるものは　ペイント・印刷インキ・繪具・製紙・人絹・擬革・護謨・セルロイド・白粉・琺瑯・硝子・陶磁器等で尙ほその需要增加に伴ひ第二期の增設擴張を行ふ豫定になつて居ります。

(E) 硫酸工業

◎ 日本硫酸株式會社

當社は昭和十一年五月國產工業株式會社と日本鑛業株式會社との共同出資に依り資本金壹百萬圓を以て設立したるもので目下沖ノ山に工場建設中にして同年末工事竣成し昭和十二年早々より營業開始の豫定であります。

宇部工場は專ら硫酸製造に從事するものにして第一期計劃としては最新式製造法たるモンサント式に依り强硫酸．日產五拾瓲を製造するものでありまして．原料鑛石は主として日本鑛業株式會社所有の四國方面の諸鑛山より供給を受ける事に成つて居ります。

製品は一部分を隣接の傍系チタン工業宇部工場に供給するの外大部分は一般に販賣する事に成つて居り。第一期完成後は斯界の情勢に應じ順次增設擴張する豫定であります。

(F) ガス工業

◎ 宇部市營瓦斯

宇部市の瓦斯事業は夙に有志の發起で株式會社を以て經營を許可されたものを事業の本質に鑑み市に讓渡され昭和七年六月起工し十二月から供給開始されたものであります。能力は一日に1350立方米でありますが最大能力は2000立方米であります。

昭和八年19万立方米から十年は23万立方米近く送出し漸次增加しますが當地が石炭の產地だけに余り需要が汪盛ならざるを遺憾とします。

(5) 電力工業

◎ 山口縣電氣局第一第二發電所

宇部に第一發電所・第二發電所を有し．前者は容量8.000KW．後者は現在50.000KWの能力を持ち其の最新式の設備と宇部の粗惡炭を原料とする點及び機械力に依る人手のいらぬ事（職員一五名職工七三名定夫六名）に於て他に比類なき發電所であります。然かも其の能力に於て又實際發電量より云つても山口縣下の需要電力の大半はこゝから供給して居り縣下配電全部が其の指令のもとに動いて居るのであります。

之も元は矢張り宇部の人々が宇部炭を電力に變化して工業用並に一般用に使用せしめたのに端を發して居ります。

明治四十三年　宇部電氣株式會社創立　（資本10萬圓—150萬圓）
大正 十三年　山口縣營となる　第一發電所
昭和 四 年　宇部第二發電所竣工　第一期工事
昭和 八 年　第二期工事完成　（50.000KW）

705
58

第二發電所は近代科學の粋を集め機械に於て又設備に於て非常に良く合理化されて居ります。

運炭設備　石炭船から揚炭機で**アンロード**され走行起重機に依つて貯炭場へ それから**ベルトコンベヤー**に依つ汽罐室へ持ち込まれます。

汽罐設備　九臺の微粉炭機に依つて微粉となり汽罐に次込みます。汽罐は

ストカーによる汽罐	二基	
微粉燃燒による汽罐	三基　計	五基

汽機發電設備

第一期工事による**タービン**	7.000KW	二基
第二期工事に依る**タービン**	18.000KW	二基（一分間3.600回轉）

合計　四基　實に50.000KWの發電能力を有するもので有ります

送配電設備　かくして此の電力は工廠地帶に直送する他は桃山の變電所へ送られるのであります

又之に附帶して海水を毎分250立方米の取水設備により**コンデンサー**冷却其他の用水に使用。

石炭殻を**サンドポンプ**で埋立地に持て行きます。

(6) 製　油　業

◎　日本發動機油株式會社

當社は昭和三年一月專賣特許第七六二六一號應用の航空機用潤滑油製造を目的として創立せられた。陸軍省指定工場で。其後事業の進展に伴ひ自動車・**デイゼルエンヂン**等の內火式機關用潤滑油其他一般の減摩油數十種及**グリース**の各種類を製造して西日本の製油界に重きをなして居ります。

現在資本金四拾萬圓一年生産能力900萬立。從業員七十余名。敷地8.700坪宇部港內埋立地の一角三面海をめぐらす海運至便の要所に位して居ります。

原料油の選擇に關しては特に留意して內外の優良品を集めその精製に當りてはあらゆる斬新の方法及設備を利用して居る爲めに其製品は品位の優良なるを以て斯界に推賞されて居るのであります。

軍部納入の航空機用**フルゴール**及今回研究を遂げた耐寒性品種とは共に引續き實用せられ報國の社是を全ふして居ります。

一般市場向け製品の販賣に對しては從來の總代理店主義を廢し本社及東京出張所が其區分を定めて直接之に當り別に大阪・朝鮮・臺灣・滿洲に各駐在員を派して着々販路を開拓して品質本位の大旆を進めて居ります。

(7) 機　械　工　業

◎　株式會社　宇部鐵工所

當社は炭鑛及諸工業會社の諸機械製造及船舶の製造修理を目的として營業を開いたものでありまして

資　本　金	115萬圓

その生產能力は

鑄　造　品	1200噸
橋梁及鐵構	2500噸
鑄　鋼　品	600噸
計	4300噸

であります。

當社は大正二年に組合組織宇部新川鐵工所（資本10萬圓）として創業。大正六年には50萬圓の株式會社宇部鐵工所となり。昭和九年に增資して資本金115萬圓となり現在に至つております。

其製品は鑛山用諸機械・諸工業用（セメント・窒素・火藥・染料・曹達等）諸機械・鐵骨建築・橋梁起重機等の製作を致しております。

昭和九年十月電氣爐を設置して鑄鋼品の製造と齒車齒切作業を開始しました處註文品殺到益々隆昌を見つゝあります。

動力は電力を山口縣宇部第二發電所より供給され電氣爐用700K.W. 一般工場用150K.W.（使用電動機合計馬力數500）で蒸氣は35馬力を有して居ります。

原料及製品の輸送は完備せる岸壁の積込設備と鐵道引込線とを有し最も便利に出來て居ります。

尙當會社は善良なる技工養成の爲め長門工業學校を直轄經營しており生徒は午后當所にて實習に當り其の卒業生は當社は勿論各工業炭鑛界に活動しております。

◎　國產工業安來製鋼所宇部工場

安來製鋼所の本工場は島根縣安來町に在りまして同縣木次町及鳥上村に原料工場を持つて居ります。宇部工場は其分工場で電氣爐に依り高級工具鋼・飛行機用鋼等を製造して居ります。

宇部工場は昭和九年五月より仕事を始めました。元來此の安來製鋼所の創業は古く明治三十二年でありまして其後幾星霜を經て今日國產工業株式會社の製作所となりましたが。昔から終始一貫和鋼の特徵を普く江湖に紹介し之に依つて日本刀材料を始め・高級鋼の製造に努力して居ります。

宇部工場の設置も亦之の意味に於て山陰の不便の土地より輕便の宇部に進出して來たものであります其の原料は大部分山陰地方より得て居るものであります。

◎　竹　內　鉄　工　所

個人經營でありまして主としてセメント用スチールボールを作つております。

一ケ月の生產額は	ボ　ー　ル	二百瓲
	リベツト	六〇瓲
	ボールト	九〇瓲

705
58

鋼の硬さ及ねばりの点で優秀なる技術を持つものでありまして。全國セメント會社・鑛山等に直接納入し又大倉商事會社等も取扱つております。尙壓延ロールも設置し各種材料の壓延も致しております。

(8) 琺 瑯 工 業

◎ 合資會社宇部琺瑯鐵器製造所

昭和八年三月より個人經營として創業昭和八年八月合資會社に變更され。その業績の進展に伴ひ工場增設の必要に迫られ昭和九年六月建坪數約四百坪餘を以て第二工場を建設し職工數百二十名を使役しております。

製品は主として門司港より一部を大阪神戸兩港より輸出しております

原料は主として大阪より購入し鐵板は八幡製鐵所其の他より仕入れ燃料たる石炭は宇部炭を使ひ隨つて製品出荷並に原料購入上交通利便から宇部市に工場が設立されたのであります。

目下耐熱耐寒耐酸性の折曲自在なる建物屋根用波板の製作に着手しつゝあります。

製品	辨當入・コツプ・石鹸入・匙（各寸法各種）鍋
生産能力	一ケ月 520梱餘（一梱は約30貫）
輸出先	シヤム・ジヤバ・フイリツピン・佛領印度支那
	印度本國・ビルマ・濠洲・東アフリカ中・南米
	英本國・滿洲國・中華民國

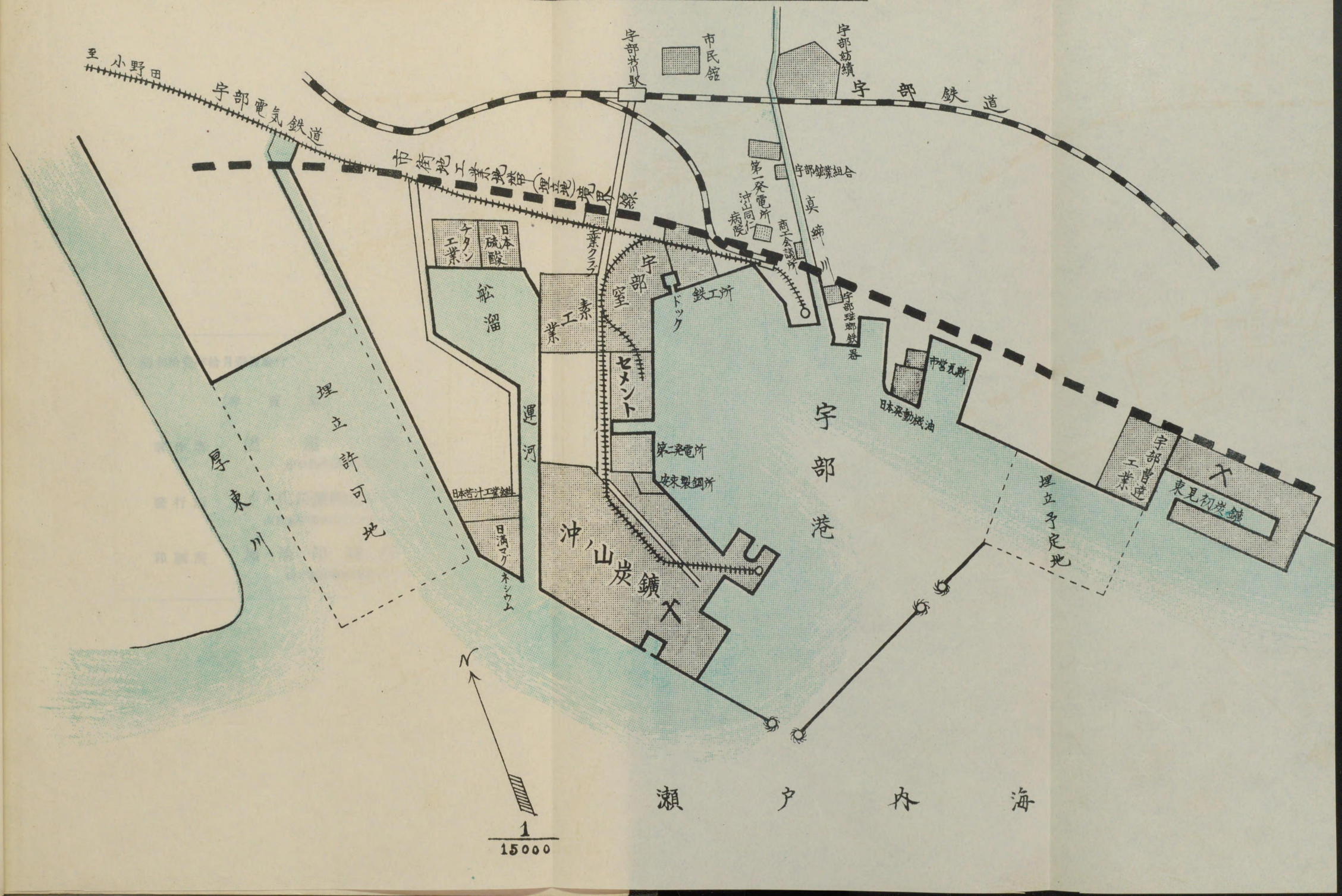
社・鑛山等に直接納
も致しております。

業績の進展に伴ひ工場
数百二十名を使役して

たる石炭は宇部炭を
れたのであります。
あります。
各種）鍋

印度支那
中・南米

宇部市工業分布略圖



705
B8

昭和拾壹年拾月壹日發行

（非　賣　品）

著作者　俵　田　　明
山口縣宇部市東區神原

發行所　沖ノ山炭鑛株式會社
山口縣宇部市小串一九八〇

印刷所　加治印刷所
山口縣宇部市西區本町

705
68

705-68
1200501583445